

宇井さんとの出会い

西 泉

宇井さんとの最初の出会いは2部の宇井ゼミだった。東京の短期大学を辞めて沖縄大学に赴任してほんとうに大丈夫なのか確かめるために、1987年の秋、ぼくは沖縄大学を訪問した。下見である。

そこで学長に宇井さんを紹介してもらい、その日の晩、宇井ゼミに飛び入りで参加した。

ゼミの最初に宇井さんは出席をとった。「喜屋武、山城、金城、島袋…」と読み上げて、「名前がヤマトとは全然違うでしょう」とぼくにコメントする。生まれてはじめて沖縄に渡ったぼくはなるほど「違うな」と思う。ある社会人学生が質問をした。

「この本に出てくるのですが、フェーン現象ってなんのことですか？」

宇井さんはいてねいに答える。その説明はわかりやすく、ぼくのあやふやなフェーン現象についての知識の穴をその回答が全部埋めてくれた。質問をした学生もきっと一生フェーン現象がなんであるか忘れないだろう。

ゼミのあと大学から歩いて数分のところにあるお宅にお邪魔した。缶ビールを片手に話し込む。沖縄では惣菜などをいろいろな店で売っているので一人暮らしでも不便はない、肉がまるごとつまっている中国製の缶詰がこちらでは手に入るから重宝する、なんていう話しである。

宇井さんは話題が豊富である。あっという間に時間が経った。11時をまわったころだった。電話が鳴る。宇井さんは時計を見上げて「まあ、（電話をかけてくる時間としては）ぎりぎり許せる時間だな」と呟きながら受話器を取る。「紀子か！今、沖縄大学に来ようという奇抜な人がここに居るんだが話してみるか？」と受話器に話しかけて

おられた。こうして奥様の名前が紀子さんだということもこの日知るところとなる。

その後、1988年から10年以上、教養科の同僚として一緒に働くことになった。その間いろいろなことを教えていただいた。そして様々なことについて語り合った。

奈良の寺で真言宗の僧侶をしていた友が水銀中毒に侵されたときも真剣に相談に乗っていただいた。古いお寺では建物や仏像を守るために、多くの防虫剤を使うらしい。2週間に一度、宇井さんのゼミが終わった後、大学近くの居酒屋で彼女のために二人で対策会議をひらいた。その結果をぼくはメールで彼女に伝えた。

寺を辞め、アメリカに戻って治療した彼女は徐々に健康を回復した。ぼくには1年近く続いたこの会議での、宇井さんとの語らいが、ひとつの財産となって残った。